

令和2年度 内灘町子ども読書感想文 コンクール作品集



発行 内灘町学びの風推進協議会
内灘町教育委員会



令和二年度 内灘町子ども読書感想文コンクール 作品集

《目次》

5 ふんってふしぎだな		清湖小学校	二年	米田 羽那	1
とくべつな出会い		鶴ヶ丘小学校	三年	安嶋 凜	2
「あなたの声がききたい」		大根布小学校	四年	出山 陽士	4
六千人の命を救え！ 外交官・杉原千畝		大根布小学校	五年	川原 颯太	6
「もう逃げない」を読んで私が大切にしたいこと		白帆台小学校	六年	浅井 麻衣	8
この世界でいちばんたしかなもの		内灘中学校	二年	吉谷 優衣	10
「イエロー」と「ホワイト」と「ブラック」が共に生きる世界		内灘中学校	二年	吉田 恭花	13
令和二年度 内灘町子ども読書感想文コンクール 入賞者一覧					16

5ふんってふしぎだな

清湖小学校 二年 米田 羽な

わたしは、「ながーい5ふんみじかい5ふん」という本を読みました。読みおえて、思ったことは、5ふんってふしぎだということです。わたしがながいと思う5ふんは、ベンキようする時かんです。とくに、さんすうのmondいを「あと5ふんがんばろう」といわれると、「えー、やっとおわったと思ったのに。」とやるのがいやだからいいかえます。それから、出かけるときに、おとなが、「あと5ふんだけまって」といわれるのでわたしは、「えー、早く行けると思ったのに」とすこしためいきをしてしまいます。

はんたいに、わたしがみじかいと思う5ふんは、大すきな水ぞくかんでイルカショーを見たときです。イルカやアシカがすごいわざをしている

のでイルカショーが大すきです。かかりの人が「これで、おわりです。」というと、「えー、もうおしまい？」とぎんねんな気もちになります。プールに行ったときウォータースライダーにのろうとすると、ならんでいるときの5ふんはながいのに、すべていているときは、とてもみじかくかんじます。

5ふんは、びょうでかぞえると3百びょうになります。同じ時かなのに「3百びょうかぞえてね。」といわれたら「えー、したくない。」とこたえます。それは、ながくて、かぞえたくないからです。

こうしてみると、5ふんがながくかんじるのは、いやなことをしているときが多いです。5ふんがみじかくかんじるときは、たのしいことをしているときが多いです。同じ5ふんなのにふしぎだなと思いました。

とくべつな出会い

鶴ヶ丘小学校 三年 安じま りん

わたしは、「あしながおじさん」という本を読みました。この本をえらんだのは、本の題名から、あしながおじさんって、どんな人のことだろうと、気になったからです。

この本は、生まれてすぐにりょう親にすてられて、十八年間ずっと、こじいんというしせつでくらしてきた、ジュデイーという女の子の物語です。ジュデイーは、知らない男の人にお金を出してもらって、大学にいかせてもらえることになりました。しかし、そのかわりに、こじいんのいん長からめいれいされたのは、その人に手紙をだすということでした。ジュデイーは、手紙の相手を、あしながおじさんと名前をつけます。

そして作家になりたかったジュデイーは、大学でおきたことを手紙に書いて、あしながおじさんへ送ります。

わたしがこの本を読んでいちばん心にのこったところは、ジュデイーがあしながおじさんのしようにたいをした、物語のさいごのぶ分です。あしながおじさんはジュデイーが親しくしていた、ジュリアというクラスメイトのおじさんだったのです。名前はジャービーです。ジュデイーは、ジャービーと今までに何ども会っていて、ジャービーのことが大スキでした。あしながおじさんが、ジャービーだとして会いにいったときに、「ぼくがあしながおじさんだということ、わからなかったの?」と言ってわらう場面がとても心のこりました。わたしはこのぶ分を読んで、ジュデイーといっしょにえ顔になりました。もし、わたしがジュデイーと同じ立場だったらと考える

と、感動して、うれしくて、たまらないと思います。

わたしはこの本から、全く知らない人となにかのきっかけで知りあうことができて、おたがいに、すきになるというすてきなことが、おこることもあるということを学びました。わたしはこれから、知らない人にも自分からすすんであいさつをしようと思います。なぜなら、わたしにも、いつすてきな出会いがおとずれるかわからないし、小さな出会いでも大切にしなければならぬと思うからです。

ジュディのゆめは作家でしたが、わたしのゆめはマンガ家になることです。マンガ家は、絵もかくけど、文しょうを考える力もひつようです。その力をつけるためにジュディのように、大すきな人にたくさん手紙を送りたいと思います。



「あなたの声がききたい」

大根布小学校 四年 出山 陽士

ぼくは、「あなたの声がききたい」という本を読みました。この本を読んだきっかけは、ぼくは願わなくても人の声がきけるし話すこともできます。ぼくのまわりには、聴覚障害の方がいます。でも、ときどき手話を使っている人を見かけます。どのように、コミュニケーションをとっているのか知りたかったので読んでみました。

登場人物の加奈子が、聴覚障害を持つ両親の深い愛に包まれて成長し、手話ができる看護師になったお話でした。看護師として働いていたころ、けん吾君と出会います。けん吾君の両親が聴覚障害だと分かり、加奈子は、両親とずっと会話をし、てほしくて手話を教えてあげていました。ぼくは、

けん吾君の気持ちを一番理解してあげられるのは、加奈子だと思います。自分とにたかんきようで自分と同じ思いや悲しい気持ちになってほしくなかったんだと思います。加奈子のやさしさです。けん吾君は、手話を教えてくれる加奈子のことをどう思ったのかぼくは、考えてみました。手話を今まで教えてくれる人が居なくて両親としゃべれず、さびしかったんだと思います。最初はす直になれなかったけど心の中は、感じたことのないくらいとてもうれしかったんだとこの本の中から読み取れました。ぼくは今、手話ができなくても相手の気持ちを考えられる人になりたいです。

ぼくの心にのこった場面は、加奈子とお母さんのメールです。「もしも、一度だけ神様が願いをかなえてくれるなら、あなたの声がききたい。」と送られてきた所です。お母さんは耳がきこえるようになりたいという願いではなく、加奈子の声

がききたいというお母さんの本当の願いだと思いました。音のない世界は、ぼくには想ぞうがつかないけれど、おねがしめつけられました。耳がきこえることは当たり前ではありません。

「挫折が大きいと、つい、自分はそんをしている」と思いがちだけど、じつは、挫折を乗りこえる力が、その人にそなわっていることを神様が知っていて、人生の勉強のために挫折という宿題をあたえてくださったんだよ」という言葉がありました。ぼくも、陸上やスイミング、学校で失敗して落ち込むことがあるけれども加奈子のように、めげず、あきらめずに努力をすることを教えてくれました。学校の授業で、高れい者や障害のある方にとって住みよい町なのかどうか調べました。町のかんきょうが、整っているだけではなく障害のある方、ない方、関係なくおたがいに助け合うことが大切だと学びました。また、障害のある方は、その

障害をおぎなう方法や手だんを持っています。ぼくは、それを障害と考えず「個性」ととらえていきたいです。

全ての出会い、出来事はぐうぜんではなく必ぜんであり、ぼくは、これからの一つ一つの事を大切にしたいと思います。この本に出会い、手話にきょうみを持たせてくれたのは必ぜんだったのかもしれない。



六千人の命を救え！ 外交官・杉原千畝

大根布小学校 五年 川原 颯太

ぼくは、杉原千畝さんの伝記を読みました。なぜぼくが、この本を読んだかというと、ぼくは世界の中でもい大なことをした人のすばらしい人生のことについて、語っている伝記のような本が大好きで、この本の題名を見て、「命を救え。」と書いてあり「この杉原千畝さんは、どんなことをした人なのだろう。」とドキドキワクワクしてきましたからです。

この「六千人の命を救え！ 外交官・杉原千畝」という話は、杉原さんが岐阜県に生まれて、ロシア語を学ぶために中国のロシア人がおおぜい住んでいる町ハルビンへ行きロシア語を学んで、外務省に入ります。領事館で多くのユダヤ人を日本に

送り、命を救って、ユダヤ人から、ユダヤ人のできる最高の感謝の印、「諸国民の中の正義の賞」を送られて、ユダヤ人の明るい未来をつくった。というお話です。

ぼくがこの本の中で一番心に残ったところは、ユダヤ人を救うために出していた、「命のビザ」が外務省に「ちゃんときそくを守ってビザを出しなさい。」と注意され、ビザを無こうにさせられそうになったけれども、杉原さんは、「自分がビザを書くのをやめてしまったら領事館の前にならんでいる人が、助かるのに、助からなくなってしまう。」と思い、ウラジオストクに到着するまでに、行き先の国の入国許可を得ること。そして、日本からその国へ向かう船の予約をすませること。さらに旅費については、日本に送る手配をすませることを誓約させ、誓約した人物に限ってビザを出す。という自分なりの条件でビザを出し続けたところ

が心に残りました。なぜかという、ぼくがその時領事館でユダヤ人にビザを出し、そのビザについて外務省に注意されているとします。すると、ぼくだったら「すみません。次から気をつけます。」という内容の電報を出し、これ以上ビザを出したら自分が「何か罰せられるかもしれないな。」と思い、助けることのできるユダヤ人の命を無だにしていたと思ったからです。杉原さんは常に自分のことよりもみんなの事を思って行動している、と思い感動しました。そんな杉原さんにあって、自分に無いものって何だと思いますか。ぼくは、「ぼくに無いもの…ぼくに無いもの…」とがんばって考え、ぼくに無いものは、ズバリおいこまれたときの決断力、自分よりも他人を大切にできる気持ちの二つだと思いました。他に、自分と似ているところは、自分で「やる。」と決めたら必ずする、有言実行なところだと思いました。

ぼくがこの本で筆者が伝えたいのは、杉原さんのいつでも他人の事を大切に思っているところ、杉原さんが現代に良いえいきょうをあたえたということだと思いました。

ぼくは、本を読み「自分で物事を決め、実行すること」を得られました。なので今後、パツと答えの出でこないことまた、はっきりとした答えの無いことの答えを自分で見つけて、実行していきこれから活かしていきます。



「もう逃げない」を読んで

私が大切にしたいこと

白帆台小学校 六年 浅井 麻衣

私は、「もう逃げない」というお話を選びました。その理由は、このお話に出てくる修一という男の子が引き取り手のいない犬のマックを、家で飼いたいと話するのが苦手なお父さんに自分の意見を話せるようになって、すごいなと感心したからです。

このお話は、気弱な修一という男の子が引き取り手のいない犬のマックを自分の家で飼いたい、その思いを話すのが苦手だったお父さんにぶつけるというお話です。日々、修一は下痢（過敏性腸症候群）に悩まされています。ある日、修一は学校をサボってしまいました。おじさんに病気の

ことを話すと、リラックスしろと言われました。おばあちゃんからもらったお守りをなくしてしまいました。それを拾ったリクという男の子から返すかわりに、犬の散歩を週三日たのまれました。しぶしぶマックと散歩を始めましたが、マックいるととても楽しかったです。けれど、飼い主の関さんが引っこすことになり飼えなくなりました。そこで、自分の家で飼いたいと自分の気持ちを、お父さんにぶつけました。お父さんが反対したので、飼い主が見つかるまでという約束をしたのに、マックをむりやり雨の日に追い出しました。ぐうぜん、おじさんの彼女がマックを見つけてくれました。修一の強い思いにお父さんもマックを飼うのを許してくれました。

私はこのお話を読んで、修一がお父さんに自分の意見を言う場面が心に残りました。なぜなら、私も自分の意見を他の人に伝えるのはとても勇気

がいると思ったからです。しかも修一は話すのが苦手なお父さんに話すことができたのだからすごいなと思いました。私だったら苦手だからきよりを置こうかなと考えます。でも、修一はしっかり伝えられたのでこの場面が心に残りました。

私は、修一のように自分の意見を伝えるというのと似たような経験をしたことがあります。それは、私もお父さんに自分のやってみたい習い事をどんな内容でなぜ習いたいか思いをぶつけたことがあります。話すのは、とてもきんちょうしたけど認めてくれました。だから思わず、修一がお父さんに自分の意見を話しているとき、「がんばれ!」と思ってしまいました。

この本を読んで私は、自分の意見を伝えることがとても大切なんだと分かりました。もし、他の人が意見を伝えようとしていたら、しっかりこれ

からは聞かなくてはいけななと感じました。そして、私も他の人と意見がちがったとしても、しっかり言いたいなと思いました。そうすることによって、このお話に出てくる修一のように認めてくれたり、仲良くしてくれたりする人もできると思うから修一みたいに話すのがいいと思いました。私も修一みたいに悩んでいる人もいます。いうことを頭に入れておきたいです。



この世界でいちばんたしかなもの

内灘中学校 二年 吉谷 優衣

私が「二分間の冒険」を初めて読んだのは小学五年生の時で、父が私に買ってくれたことがきっかけだった。そしてこの本は、私にとって大切なことを教えてくれた本となった。

「二分間の冒険」は黒猫のダレカによって別の世界へ連れていかれた小学六年生の悟が、その世界でいちばんたしかなものに姿を変えたダレカを探す物語だ。この世界には悟の友達がいいたが、みんな悟を知らず、暮らし方も全然違っていた。この不思議な世界で悟は、元の世界で同じクラスだったはずのかおりと竜退治をすることになる。

悟とかおりは強い。私は竜と戦う二人に対して

そう感じた。二人は竜がいる館へ行く途中、一人のおばあさんに剣をもらった。そして、ふつうの剣では竜をたおすことができないが、その剣は竜をたおすことができる剣であなたたちは選ばれた者だと言われていた。しかし、竜の館に着くとある少年からその話は全てうそだが、ここにいるみんなが同じ人から同じ話を聞き、自分が選ばれたものだと思ってしまうと教えられた。

そのおばあさんは、竜の館へ行く子どもたちにせの希望を与えていたのだ。このことを知った二人はみんなに本当のことを伝え、自分たちの力で竜に勝つ方法を必死に考えた。そして、悟たちは竜に勝ったのだ。本物の希望を信じてあきらめない。私はこの姿に二人の強さを感じた。竜に勝った二人はかっこいいと思う。そして勝つことができたのは二人の心の強さがあったからではないだろうか。もし、私が悟やかおりの立場

だったら、ふつうの剣でも勝てる方法があるかもしれないという小さな可能性を信じ続けることはできないと思う。私は、希望を信じ続けられる二人に対して、自分の心の弱さを実感した。

そして私はこの二人の言葉から大切なことを学んだ。悟は竜をたおした後、ダレカはかおりに姿を変えていると考えた。自分にとってこの世界でいちばんたしかかなものはかおりだと思ったのだ。しかしダレカはかおりではなかった。するとかおりは言った。「おしえてあげるわ。あなたにとってこの世界で、いいえどの世界でも、いちばんたしかなもの。それは悟、あなただったのよ。」この言葉を信じて悟は、ダレカをつかまえて元の世界にもどる決心をする。そしてかおりに言った言葉の中に、「ぼくがいちばんたしかなものなら、そのぼくがたしかだって思ったもの、みんなも、そしてきみも、ぼくにとってきつとたしかなものなん

だ。」という部分がある。かおりは、この世界でいちばんたしかかなものは、自分にとっていちばんたしかなもののことだと思うと言った。そして、悟をいちばんたしかかなものだと思っていたいそんな自分自身がいちばんたしかかなものなんだと悟に話した。しかし私は、どうしても自分にとっていちばんたしかかなものが自分だと思えなかった。私が強いと思った悟とかおりでさえお互いのことをたしかだと思っていたと言った。竜に勝った二人でもそう考えるのに、こんな心が弱い私が、自分にとっていちばんたしかかなものだなんてとても思えない。きつと、自分をたしかだと思うのは難しいことのはずだ。しかしこの悟の言葉から、他のものやこと、人をたしかだと思うのは、自分をたしかだと思っているからなんだと気付いた。私は今まで、他の人やものの方が自分より確かだと思い信じてきたことがたくさんあった。でも

それは、自分を信じていないのではなく自分が
いちばんたしかだからこそ、信じたいと思うもの
を信じられるんだと知った。そしてこの答えに
行きつけた二人。お互いを信頼し合う二人から友
情の大切さを教えられた。二人はお互いがお互い
をたしかだと思っている。だれかからたしかだと
思ってもらうことはとても難しい。二人には信頼
し合うことができる強い友情があり、その友情が
二人を強くしたんだと思った。

「この世界でいちばんたしかなもの」。この本を
読むまでの私はそれが何かなんて考えたことが
なかった。でも、五年生の時にこの本に出会い、
そして中学二年生の今、もう一度読んだことで
それは「自分」なんだと気付くことができた。私
は悟やかおりのように強くはない。これから何度
も失敗したり、上手くないことがあったり
して、自分がたしかだと認めたくないと思うこと

があると思う。でも、どんな時でもどんな状況で
あっても、自分がいちばんたしかなのだ。だから、
自分を認めたくないというのも私が感じた私の
たしかな気持ちであり、向き合わなければいけ
ないんだと思う。もう一つ私は、自分がたしか
だと思う他のものを信じることも大切だと知った。
だから私は自分がたしかだと思うものを信じたい。
そして、自分だけではなく、他のだれかにとって
も確かに信じたいと思われるような、そんな存在
になりたいと思う。



「イエロー」と「ホワイト」と

「ブラック」が共に生きる世界

内灘中学校 二年 吉田 恭花

私は、「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」という本を読んだ。この話は、この本の筆者である日本人の母とアイルランド人の父をもつ筆者の息子が、EU離脱問題が過激化する英国で、市の学校ランキング元最下位の「元底辺中学校」に通う話だ。そこで筆者の息子が、人種差別や貧困者への差別、いじめなどの問題に次々とぶち当たっていく。

私がこの本を読んでまず衝撃を受けたのが、英国やヨーロッパでは、日本人も人種差別を受けることがあるということだ。「ファッキン・チンク」という言葉がある。これは、「東洋人消えろ」と

いうような意味である。差別や偏見は、その人を他人と意識することで起こるものではないかと私は考える。この本の中に、DVDショップでの筆者の体験が書かれている。それは最初は笑顔で出てきたDVDショップの店員が、相手が外国人だと知った瞬間、雑な接客になったという話だった。母国への誇りや自尊心、仲間意識をもつことは悪いことではない。しかしその店員はそれらが強すぎるあまり、外国人など、自分とは違う世界に住む人のことを他人だと見なしてしまい、拒絶したり攻撃したりしてしまったのではないかと私は考える。また、仲間を意識すると、無意識に多様性ゼロの自分の世界を作ってしまう。そのため、自分の世界に合う人とは、助け合うことができて、自分の世界と反する人には、その人が困っていても、そのまま放っておく、見ようともしないということが起こる。このように、差別

や偏見の原点は仲間意識なのではないかと私は考える。

私がこの本を読んで衝撃を受けたことはもう一つある。それは、筆者の息子が言った「人間は人をいじめるのが好きなんじゃないと思う。：罰するのが好きなんだ。」という言葉だ。「いじめる」ことは、明らかに悪いことだと分かる。しかし、「罰する」というと、罪を犯した人に下すものだから、別に良い響きではないが、悪いことでもない。悪いことだと分かっている堂々と悪い行動をとる人はなかなかいない。だから、やる本人は正義感が原動力となっていることが多く、その正義が暴走するのだと思う。仲間意識が原動力となっている差別には、レイシスト（差別する人）への対抗心の表現として、「レイシストに向かって中指を突き立てて戦う意志を表明しましょう」という言葉がある。だが、私はそれは違うと思う。

なぜなら、人種差別問題は、勝負でも競争でもないからだ。その競争心が差別をさらに加速させていると私は思う。

では、差別やいじめは、どうすればなくなるのか。私はこう考える。まずは、本にも書かれていた、「いろいろあって当たり前」と、相手を理解することだ。自分の世界を基準に物事を決めつけない。次は、誰でも自分の仲間であると思うことだ。実際に、外国人も犯罪者も国民栄誉賞受賞者も同じ人間だ。決して他人ではない。この本の中に、筆者と息子が日本にある実家へ帰省した時の話が書かれている。息子とその祖父は、お互いの母国語は一つも分らないのに仲良しだという。血がつながっているからもちろん他人ではないが、互いに「外国人」だ。つまり、国が違ってても他人だと意識しなければ、言語の違いも考え方の違いも関係ないと私は考える。後は、「エンパシー能力」

をつけることだ。「エンパシー能力」とは相手の感情や経験を理解する能力のことで、誰でもみんな持っているわけではない。本では「誰かの靴を履いてみること」だと表現している。本の最初の方に、片方の靴ひもがほどけた靴のイラストが描いてある。私はこれらの意味を、不自由で歩にくい誰かの靴を履いてその人の気持ちを知れ、という意味だと解釈した。大して「善意」とは、頼りないけれど誰もが持っているものだ。筆者はエンパシー能力の原動力になるものは善意で、エンパシー能力と善意はつながっていると考えている。つまり、エンパシー能力は誰でもつけられるもので、少しの善意で、差別といじめはなくなるのではないかと私は考えた。

差別や偏見、いじめをなくすことは難しい。なぜなら、差別が表に表出していないだけで実は裏で存在しているかもしれないし、減ったとして

も、「多様性ワールド」を渡り歩いていくことはなかなか危険なことだからだ。ささいな言動で地雷を踏むこともあるかもしれない。それでも私は、「イエローでホワイト」な人が「ブルー」にならない世界の方がいい。肌の色や考え方が少し違ってても、人それぞれだから当たり前である。狭い世界に住む人は、自らその世界を作りあげ、人を攻撃し、その分されて傷つく。そこに居る限り、それが終わることはない。それよりも、私は、自分以外の人の気持ちを知って広い「多様性ワールド」で歩いていきたい。



《優秀賞》

5 ふんってふしぎだな	清湖小学校	二年	米田	羽那
とくべつな出会い	鶴ヶ丘小学校	三年	安嶋	凜
あなたの声がききたい	大根布小学校	四年	出山	陽士
六千人を救え！ 外交官杉原千畝	大根布小学校	五年	川原	颯太
「もう逃げない」を読んで私が大切にしたいこと	白帆台小学校	六年	浅井	麻衣
この世界でいちばんたしかなもの	内灘中学校	二年	吉谷	優衣
「イエロー」と「ホワイト」と「ブラック」が共に生きる世界	内灘中学校	二年	吉田	恭花

《入選》

「おれよびだしになる」を読んで	大根布小学校	二年	中本	凌雅
おいしいの数	大根布小学校	二年	前田	依槻
キャベたまたんていじごくツアーへごしようにたい	白帆台小学校	二年	井上	璃人
心ってどこにあるのでしょうか	西荒屋小学校	二年	中村	匠稀
へんしんおぼけ	鶴ヶ丘小学校	三年	大塚	郁弥
やさしいかあさんぎつね	鶴ヶ丘小学校	三年	藤田	銀次郎
「なまえつけてよ」を読んで	大根布小学校	三年	市川	美央里
「笑われたくない」を読んで	大根布小学校	三年	植原	まは

北極と南極の「へえ」くらべてわかる地球のことを読んで
西荒屋小学校 三年 川江 知輝

内ただ海岸未来へつなごう
向栗崎小学校 四年 北川 友那

「子ぶたのトリュフ」を読んで
向栗崎小学校 四年 矢花 羽子

ポリぶくろ、ーまい、すてた
大根布小学校 四年 宮崎 湖々

アトリのようにになりたい
向栗崎小学校 五年 竹中 星愛

ただいま！マラング村
鶴ヶ丘小学校 五年 山崎 結央

「さすらい猫ノアの伝説」を読んで
西荒屋小学校 五年 八田 琥珀

今を生きる私達
向栗崎小学校 六年 尾ヶ口 詩埜

あやしの保健室を読んで
白帆台小学校 六年 福田 心桜

桐島、部活やめるってよ
内灘中学校 二年 石本 依与

『吹部！』が教えてくれた「本気の夢」
内灘中学校 二年 太田 讃良

この嘘がばれないうちにを読んで
内灘中学校 二年 木下 漣

生きているってすごい
内灘中学校 二年 金原 みひろ

僕の勇氣
内灘中学校 二年 堀 陽太

国民の希望の光
内灘中学校 二年 横谷 玲菜

いろんな本にふれて
内灘中学校 二年 吉岡 瞳華

自分なりの人への理解
内灘中学校 三年 島田 羽鶴生

この本から学んだこと
内灘中学校 三年 東 仁

編集後記

今年度も町内の小中学校から作品を応募いただき「内灘町子ども読書感想文コンクール」を開催することができました。児童生徒の皆さんをはじめ、子どもたちの「読書活動」を推進されている先生方、読書ボランティアの方々、保護者の皆様方にご協力をいただき、ありがとうございました。

今年は、新型コロナウイルスの感染拡大により、小中学校では、年度をまたいで約三か月の休校期間がありました。これに伴って、夏休みは例年と異なり、十日間という短期間となりました。その結果、自由研究や図工、書写の作品制作などに、じっくり取り組める状況ではありませんでした。

読書感想文についても、例外ではありませんでしたが、このような状況でも、意欲的に応募する子どもたちがいることに喜びを感じております。

今回も作品集を編集するにあたり、優秀賞に選

ばれた作品の全文を掲載しました。これらの感想文に触れ、子どもたちには、自分が読んだ時の感動や喜びを思い出してもらい、今後の参考にしてもらいたいと思います。また、先生方や保護者の皆様方には、子どもたちの感性の豊かさやその成長の様子を感じていただきたいと思います。

内灘町では、各小中学校の図書館に司書が配置されており、児童生徒にとって恵まれた読書環境の中、充実した読書活動に取り組んでいるところです。今後も、より多くの子どもたちに読書習慣が身に付き、継続していくことを願っております。結びに、改めて、コンクールにご協力いただいた多くの方々に、心より感謝申し上げます。

令和二年十一月

内灘町学びの風推進協議会

会長 桐山 一人

編集者

内灘町学びの風推進協議会

会長 桐山 一人

副会長 中新 由紀子

委員 橋本 喜美子

河野 由美子

中西 外美

荒木 真由美

竹村 文子

東度 長司

中村 敏男

浅尾 るり子

内灘町教育委員会 教育部 文化スポーツ課

